

『八戸藩遠山家日記』第七巻

本田 伸

平成十年（一九九八）に始まった『新編八戸市史』の編纂は、資料編十三巻・通史編三巻を以て、平成二十七年（二〇一五）に終了した。近世の公的記録を基に編纂された旧『八戸市史』を踏まえつつ、対象となる時代を原始・古代から現代まで、扱う地域を八戸周辺から日本全体まで広げたことで、研究の蓄積は格段に厚みを増した。それでも、分量や体裁の関係で掲載を見合わせざるを得なかった史資料が多々あり、その一部は別巻「八戸の歴史叢書」シリーズとして刊行が続いている。

「遠山家日記」（八戸市立図書館蔵、以下「日記」と略記）もその一つで、すでに六巻が刊行されている。その概要は福井敏隆氏が本誌で触れているが（「八戸の歴史叢書『八戸藩遠山家日記』第一巻〜第六巻」、『弘前大学國史研究』一四四、二〇一七年）、この度、続巻となる第七巻が出たので、内容紹介を兼ね、若干の所感を述べたい。

まず、基本事項を確認しておこう。「日記」は、八戸市立図書館が所蔵する遠山家旧蔵本約一六七五件に含まれている。八戸藩士遠山家の当主が代々書き継いだもので、七代目庄右衛門（平馬）が家督を継いだ翌年の寛政四年（一七九二）から大正八年（一九一九）までの足かけ二二八年間の記録である。一年一冊が基本だが欠本や分冊があり、平成二十八年（二〇一六）、現状の二二一件（同館「遠山家旧蔵本目録」番号三・

四一〜一五一）が県重宝に指定された。藩政の動きや地方の武家の生活、江戸時代の経済・社会について知ることができる貴重史料である。

本巻は嘉永六年（一八五三）から安政五年（一八五八）まで、六年間分・七冊（安政五年は二分冊、「遠山家旧蔵本目録」番号三・一〇二〜一〇八）を収録する。主な書き手は八代目当主の庄太夫（屯）だが、安政五年四月に病を得たため、嫡子の庄馬（庄七）が四月八日から引き継いだ。「解題」に採り上げられた主な事項は、以下の通りである。

- 【1】嘉永六年（一八五三）①庄馬の諸芸稽古（日置流弓術、御家流武学）②拝知の田代山で春木伐り③馬の買い入れ・売却④干魃の祈祷⑤アメリカ船来航の知らせ

②拝知は、八戸藩士の知行地のことである。庄太夫は家禄一二五石の上級藩士だが、そのうち一〇〇石が地方知行（≡知行地給与）で、拝知は門前村・小久慈村・長内村（現岩手県久慈市）と上館村（現岩手県軽米町）にあった。農民（≡拝知百姓）には年貢以外にも屋敷の普請・修理や引越し代、江戸登りの経費などを負担させたので、相応の気遣いが必要だった。八戸藩には知行主が農民を慰労する「椀飯」という催しがあり、遠山家では毎年十二月九日に行うのを基本としていた。

⑤は黒船来航のことで、ペリー艦隊は同年六月三日の夕刻、浦賀に現れた。翌四日には早くも浦賀奉行所の役人との折衝に入ったが、湾内での測量が威圧的と見られ抗議を受けるなど、友好的な雰囲気とは言えなかった。同六日、老中阿部正弘の判断で大統領親書の受け取りが決まり、同九日、久里浜で浦賀奉行戸田氏榮と井戸弘道がペリーと会見した。

「日記」によれば、飛脚は六月十七日の夕方に着いたという。八戸・

江戸間の飛脚は、片道八日振り（七泊八日）を基本とした。この時は六日振り（五泊六日）とあるので、早飛脚が出されたことになる。とすれば、六月十二日には江戸を発ったわけだが、この飛脚について、八戸城下の商人大岡長兵衛の「多志南美草」には「嘉永六癸丑年六月十一日、江戸御屋敷より、六日積の御飛脚にて」と記されている。筆者はかつてこれを飛脚の到着日と考えたが（拙著『八戸藩』一二七頁）、「日記」との整合性から、同十一日か同十二日に江戸を出たと見るのが妥当なので、訂正しておきたい。

【2】嘉永七／安政元年（一八五四）

①河内屋から本を借用②小高帳改め③軍事訓練（妙野、白山平）④藩主の台場巡見（八太郎、湊場尻、館鼻座居口、鮫、小舟渡、久慈）⑤庄太夫の退役願⑥安政に改元

①の河内屋は、八戸きつての造酒屋・橋本八右衛門家である。遠山家の屋敷に隣接し、何かと付き合いがあった。橋本家は、俳諧や絵画など地元の文芸活動を支援した。花巻出身の画家橋本雪蕉は縁あって橋本昭方の義弟となり、京都・鎌倉・江戸で暮らした後、晩年は八戸に戻って同家の世話を受けた。また、吞香稲荷社（二戸市）の小保内家と交流し、同社に書物を送っていたことも確認されている。蔵書も多かったのだろう。庄太夫は読書家で、三月二日に「朝鮮太平記」、同十七日に「天明水滸伝」、七月三日に「太平記秘鑑」を借り出している。いずれも中国の稗史小説を模倣した読本だが、こうした読本の類は八戸南部家が多数収集していて、八戸市立図書館に収蔵されている。

遠山家は、江戸登りが多かった。当主が八戸にいない場合は、嫡子がその間を埋めて「日記」を書いた。江戸に出た当主は在府中のできごと

を別冊の「勤番日記」に綴ったが、庄太夫の「勤番日記」は、文政十一年・同十三年・天保三年・同九年・十二年・弘化四年の六回分がある。安政元年にも江戸登りがあったが（六月二十日から八月一日まで）、この時の「勤番日記」はない。短期間の往復なので省略したのだろうか。寛政八年（一七九六）生まれの庄太夫は、六十歳に差し掛かろうとしていた。病気に悩まされ、勤めを休むことも多くなっていた。用人役のほか、目付・町奉行・御近習番・小納戸役などを歴任した疲れもあっただろう。⑤の退役願に見るように、隠居を考え始めた時期でもある。

【3】安政二年（一八五五）

延長③鮫沖に唐船④黒船来航時の意見書まとめを返却⑤藩士の馬を支給⑥鳥取り⑦江戸大地震の報知⑧江戸屋敷の損害⑨八戸の大雪

遠山家は北条流軍学者の系統で、代々武芸に励んだ。庄太夫は若い頃、弓・鉄砲の競技会で優勝したこともある（第二巻）。嫡子の庄馬も①の弓術を初め、さまざまな武芸を学んだ。庄馬は庄太夫の腹違いの弟五十三郎で、歳は二十九も離れている。天保十三年（一八四二）に庄太夫の養子となり、弘化二年（一八四五）に庄馬、安政六年に庄七と改名した。③唐船が現れたのは三月二日で、多くの見物人が出る騒ぎになった。前年一月にペリーが再来し、海防の重要性が叫ばれていた時期である。太平洋に面した八戸藩は改めて、浦堅め（沿岸警備）を強化した。

文化年間のロシア船来航以降、海防は八戸藩の軍役の柱として大きな意義を持った。文化四年七月「領内籌并狼煙場図」（八戸市立図書館蔵八戸南部家文書）には、十八か所の籌場・狼煙場が朱色の○印で示されている。鮫・麦生は「大堅」に、八太郎・小舟渡・有家・湊・中野は「小

堅」に指定された。天保年間に小舟渡・久慈湊が「大堅」に追加され、幕末に八太郎・湊場尻・館鼻・塩越・鮫・小舟渡・有家・久慈湊の八か所に台場（砲台）が整備された。庄太夫は家督を継いだ直後の文政八年七月、浦堅大目付兼大筒方として八太郎に詰めたことがある。庄太夫は、安見流砲術の免許持ちでもある。

⑦は、十月二日に発生した「安政江戸地震」である。マグニチュードは七、死者は約一万人。江戸城は櫓が落ち、番所が大破して、十三代將軍徳川家定が西ノ丸の吹上御庭に避難する騒ぎとなった。幕閣・大名の屋敷も被害を受け、小石川の水戸藩上屋敷では戸田忠太夫・藤田東湖が死亡した。桜田の盛岡藩上屋敷では南部利剛が負傷している。「日記」によれば、麻布市兵衛町の八戸藩上屋敷は玄関・土蔵・外屋根・壁が破損したものの、屋敷本体は無事で、ケガ人もなかった。

この年、九代藩主南部信順の実兄奥平昌高（中津藩五代藩主）が死去したため、八戸では半忌に服すよう指示が出された（「日記」同年六月二十二日条）。昌高・信順の父は島津重豪（鹿児島藩八代藩主、隠居して栄翁）である。昌高は信順が八戸藩八代藩主南部信真の養子となった際、最初の顔合わせに同道した人物である（畑尚子『島津家の内願と大奥―「風のしるへ」翻刻―』、同成社、二〇一八年）。

【4】安政三年（一八五六）①藩主信順の四品昇進②禁裏修復の御用金上納③庄馬の初出仕と近習登用④庄太夫から庄馬へ錢箱渡し⑤盛岡藩主の八戸領内巡見・海岸視察への対応⑥八戸で大地震⑦城下の被害・損害⑧御納戸金貸し付け（中里行蔵へ）

①信順は江戸生まれで、父重豪とともに鹿兒島藩の高輪下屋敷で暮ら

した。天保四年に父が死去すると、高輪に移ってきた兄の島津斉宣（鹿児島藩九代藩主、隠居して溪山）の後見を受けた。信順の八戸南部家人りは、斉宣と姉広大院（寔子、十一代將軍徳川家斉室）の尽力が大きい。信順は天保九年に信真の娘鶴姫の婿として八戸藩上屋敷へ移り、同十三年五月に家督を継いで従五位下・伊勢守、安政元年に遠江守、安政二年十二月に従四位下となった。その知らせは年明けの正月三日に八戸へもたらされ、同十九日に祝賀の儀が催された。なお、昇進内示から老中下達、関係者への周知と進物のやりとり、將軍への御礼言上、京都での口宣頂戴といった儀礼全般については、青森県立図書館蔵「四品昇進一件」に詳しい（『青森県立郷土館研究紀要』三四、二〇一〇年に翻刻文あり）。

庄太夫は江戸在府中の天保九年二月に養子御用掛となり、信順の婿入りの準備に当たったことがある。また、信順の八戸藩上屋敷への引き移り御用も庄太夫が務めた。信順の側近くに仕えた庄太夫に対し、信順はしばしば病気見舞いの品を贈っている。

藩主の江戸での交際、災害や民生への対応など、金がかかる場面はいくらでもあった。②は、幕府から命じられた「禁裏御所方御用」（御所修復費用の負担）の記事である。四月・七月に各一〇〇〇両、十月に一三二七両の、計三三二七両を上納している。そのためもあり、この年は御納戸金（藩主の手許金）の支出がかさんだ。⑧にあるように、管理役の庄太夫の元に貸付掛の中里行蔵が何度も訪れ、受取証の提出もそこそこに、百両、数百両と借り出していく。九月十七日に累計五〇〇両だったものが、十月二十五日には二二五〇両、十一月七日には三四五〇両に達した。そこでようやく「当分は申し入れを控えるように」と指示が出

たが、持ち出しはその後も止まなかった。

⑥は、七月二十三日に発生した「安政八戸地震」である。地震による津波は釜石で波高五・四メートルに達し、八戸の馬淵川では上流十一キロメートルの櫛引まで遡上した。死者は盛岡・八戸・仙台藩合わせて三七人だったが、八戸・盛岡両藩では全壊二八九軒・半壊三〇〇軒余の住居被害を出した。遠山家の隣の河内屋も、戸外生活を強いられている。

【5】安政四年（一八五七）①藩主の帰国日程の通知②老女都川らの先

着③御田屋普請（現南部氏庭園）④花火見物⑤馬淵川・新井田川の引き網⑥城下の火事⑦魚油の手配⑧城内で講談

この年は参勤の義務が解けるので、本来なら五月に藩主の帰国となるのだが、地震復興のこともあり、信順は早く国元に帰りたいと願いを出していた。二月十七日に①の通知があった後、三月十四日に再通知があり、江戸発は三月二十五日と決まった（実際の到着は四月二十二日）。

②それに先立ち、信順付きの老女都川らが八戸に入り、庄太夫が出迎えている。都川は天璋院（十三代將軍家定室）付きの幾島や島津斉彬（鹿兒島藩十一代藩主）付きの小の島と連絡を取り合い、信順に最新の政治情勢を伝える役割を果たした重要人物である。

庄太夫は、園芸に造詣が深かった。折に触れ、食用の阿房菊や青嵐などを各所に配っている。野菜も作っていて、第七巻には夕顔・茄子・わさび・大根・エンドウ・ササゲ・千筋菜（水菜の類）・大豆・唐辛子、老女都川から譲られた京瓜などの名が見える。

【6】安政五年（一八五八）①庄太夫への江戸登り命令②庄太夫の病氣

③藩主から庄太夫へ病氣見舞い④庄太夫の退役願・隠居願⑤庄馬の

家督相続⑥庄馬の御納戸役就任⑦宗門改め

①庄太夫への参府命令は、八度目である。しかし、体調不安は如何ともしがたく、辞退せざるを得なかった。④⑤⑥はその後始末で、七月九日に家督を継いだ庄馬は三十三歳になっていた。安政三年に錢箱と鍵を庄太夫から渡された時点で（同年四月二日条）予定されていた流れである。代わりに庄馬が江戸へ行くことになったが、庄馬にとっては諸学稽古で連れられていった天保十四年以後のことである。翌年正月、庄馬は庄七と名を改め、江戸へ旅立った。

以上、年代順に大筋をたどってみた。このほかに興味深かった記事を、幾つか挙げてみよう。

a 味噌煮（安政二年三月七日条）「味噌を仕込むための大豆を煮る」という意味で、要は味噌造りである。生活必需品である味噌を、遠山家は隣家の河内屋に頼んで作ってもらっていたが、河内屋が商い不正の咎で戸締めとなった際（天保九年）は、自家で豆を煮たこともあった。

b 領知朱印状の扱い（安政二年五月十一日条）將軍の代替りで更新された藩主信順への朱印状が、江戸から在所に届けられた際の対応。大名にとつては最重要の書類で、万が一も疎漏がないよう、慎重かつ丁寧に扱われた。その後は時折、陰干しを行っている記事も見える。

c ブドウ虫切り（安政二年九月一日条）ブドウスカシバという蛾の幼虫は、山ブドウやエビヅルに寄生する。嘉永六年八月十六日・二十五日条にも「昨日家来壱人召連ぶとう虫切罷越三百程切暮頃罷帰」「今日庄馬ぶとう虫切罷越百八拾程切帰」とあり、釣りエサとして取らせていたようだ。庄太夫の釣り好きは、父庄右衛門譲りである。

d イタコへの祈祷依頼（安政二年十一月二十五日条） 遠山家は上級藩士ゆえ、医者や薬の手配が比較的、容易だった。六月に出産した妻のために高価な大黃を求めたり、熊胆を与えたりしている。十一月に入り、妻・母・庄馬が風邪の症状を示したが、母はなかなか回復しなかった。薬効がなかったのでイタコを頼んだのだが、当主である庄太夫が看病を人任せにせず主体的に行っている様が垣間見える。

e オットセイ（安政三年五月十日条） 親類の白井家から「おっとせい」を貰いたいと言ってきたので、有り合わせの古いものだが切って売った、とある。滋養強壮に良いとされていたオットセイは、塩漬けて売買された。八戸近海でも獲れたようだが、弘前藩・松前藩はアイヌが獲ってきたものを納めさせており、そうした品かも知れない。

f 彗星の出現（安政五年八月二十九日条） 彗星は、江戸時代の史資料にしばしば登場する。津軽領では、延宝八年（一六八〇）十一月のキルヒ彗星（『津軽編覧日記』）、延享元年（一七四四）正月のクリンケンベルグ彗星（同）、明和六年（一七六九）七月のメシエ彗星（『封内事実秘苑』）、安政五年（一八五八）九月のドナチ彗星（『金木屋日記』）

などが記録されている（小田桐茂良「青森県内の古文献に見られる天象」、『青森県史研究』四、二〇〇〇年）。「日記」に記されたのは、ドナチ彗星である。第七巻の注記は「ドナケ彗星」となっているが、イタリア人ジョヴァンニ・バッティスタ・ドナチが発見したので、正しくは「ドナチ彗星」か「ドナチ彗星」である。「最初ハ、明ケ七時より北東ノ間ニ出登、此節暮六時より五時隠」「去月より此節共ニほうき星西ノ方ニ、長サ最初一忒間ニ見得候処、此節十間計見得候節

も有之、不同也、大ほし」とあり、初め小さく見えたものが、徐々に大きさを増していったことが分かる。安政五年八月二十九日は、グレゴリオ暦十月五日。ドナチ彗星の地球最接近は同暦十月十日（太陽最接近は同暦九月三十日）で、ひととき大きく見えていた時期だった。

「日記」には、政治思想に関する書き手の感想はほとんど現れない。藩主の動向や上級武士としての勤め振り、経済・世相の動き、家族・親戚筋との交流、農民や町人とのやりとりが淡々と記録され、個人の日記と言うよりは、家の日記と言わなければならない。しかし、その簡潔さの裏側には、ここまで見てきたように、豊かな人の営みが広がっているのである。「日記」の記事を手がかりにしてそうした部分を調べ、補っていくのは、実に楽しい作業である。それにしても、これだけの分量を活性化することの労苦は大変なもので、本書の刊行に関わった方々の地道ではあるが極めて重要な仕事に、改めて敬意を表したい。

なお、「日記」については、三浦忠司氏が『八戸藩「遠山家日記」の時代』（岩田書院、二〇一二年）に分かりやすくまとめているので、こちらを併読することをお勧めする。

（A5判、六七七頁、八戸市立図書館編、八戸市、平成三十年十月三十一日発行、二五七〇円（税込））

※注文は八戸市内の書店、または八戸市立図書館歴史資料グループ、電話・ファクス（〇一七八）七三一三三四まで

（ほんだ・しん 青森県立青森商業高等学校教諭）